

# 草の芽句会だより

NO,109  
29,9, 7

心して京都五山の送り火を  
草刈りの音響き合う城の朝

節子

重ねたる齡母似の夏鏡  
初秋の句座に心のほぐれけり

貞

朝雨を萩に残して城の道  
雨露の仙人掌にしじみ蝶

範子

咲き終えて合歡の大木静もりぬ  
萩の園つぼみ揃えて刻を待つ

純子

友逝きてバッグの底の秋扇  
百日紅ばかりの空の広がりし

文子

見返り坂茂りの中の虫の声  
萩の園小さき蕾や花二つ

貞子

文学碑足下に揺るる猫じやらし  
休みつつ萩の園まで歩みけり

禮子

百日紅名残りの花を散らしけり  
雨もよい遠くで鳴ける法師蟬

剋子

出席者 氏家 真鍋 吉崎 森 大黒 川原 馬場 小山

城山の夏は終わりであった。朝方に降った雨が上がり、時折涼しい風が吹き渡っている。

蝉時雨もう聞かれない。遠くで蝸がかすかに鳴いているだけ。脇道に入れば仙人掌が溢れ咲きハゼが色付き始めている。城山の秋は径から始まるみたい。栃の木御門跡から石段道を下る。往き交う人たちの足取りが軽い。「あの人駆け下りよる、速いなあ」「昔は私も走ったで」「今は転ばんように気をつけよるだけやなあ」大笑いをしながらスニーカーの足元を確かめつつ萩園へ向う。萩は枝咲きに初めの小さな花をつけていた。蟬の抜殻が葉裏にしがみついている。遊園地跡の芝生の色もどこか秋めいてきたよう。移りゆく季節を確かに感じる今朝の城山であった。

